

【特別寄稿】

高橋修先生を送る言葉

共立女子大学文芸学部 深津 謙一郎

高橋修先生は、一九九一年四月、共立女子短期大学文科国語専攻（現在の日本文化・表現コース）に着任されました。以来、三四年間にわたって本学の教育・研究活動に貢献され、前任校である昭和学院短期大学国文科時代も合わせると、二〇二四年度でちょうど四〇年間の専任教員歴を終えられることとなります。また、二〇二〇年四月からの四年間は、短大文科长として文科三コースの舵取り役もお務めになりました。

私が高橋先生にはじめてお会いしたのは、今から二五年前、先輩に連れられて参加したある読書会の席でした。私はその頃大学院生で、「お洒落でカッコいい人だなあ……」というのが先生の第一印象でしたが、読書会が終わったあとは「ちょっと怖い人」という印象も加わりました。「怖い」と言っても、ご存知のとおり声を荒げたりなさる方ではありません。そういう意味での「怖い」ではなくて、たとえば、ちょっとした疑問点や問題点も疎かにせず（あえて問題を蒸し返すようなことになっても）、腑に落ちるまで「それはどういうことですか？」と「理詰め」に追求なさる。「読書会だから当然」と言えば当然ですが、そういうところを拝見して、当時の

私は「ここで生半可なことを言つて、きびしく突つ込まれ、うまく答えられなかったらどうしよう。自分の無知をさらけ出されてしまうのではないか……」と勝手に決めつけてしまったのです。先日、短大の高橋ゼミから私のゼミに編入してきた学生（とても優秀な学生です）にこんな「昔話」を披露したところ、彼女も「分かります！ わたしも最初のうちは怖かったです」と打ち明けてくれたので、「ちょっと怖い人」という高橋先生の第一印象は、必ずしも私だけのものではないようです。

そんなふうには、「ちょっと怖い人」だった高橋先生と親しいお付き合いが始まった（と思えるようになった）のは、今から一五年前、私が専任教員として本学の文芸学部に着任してからです。所属こそ違いましたが、同じ学園の同僚として入試業務や公開講座等でご一緒する機会が増えるにつれ、当初の「ちょっと怖い人」というイメージが徐々に薄らいでいきました。そのことを決定づけるエピソードとして、共立音楽祭の常連「ジョン・ノレン」のパフォーマンスを挙げておきたいと思います（なお、ここでは「ジョン・ノレン」の正体は高橋修先生である、という前提で話を進めます）。

ジョン・ノレンとは、あのジョン・レノンになり切ってギターを弾き語りするアーティスト(?)で、風貌がちよっとだけジョン・レノンに似ているのですが、歌はいつもほどよく音程が外れていて、ジョン・レノンならぬジョン・ノレンファンを楽しませてくれます。そういう意味では、ジョン・ノレンは、お客さんを第一に考えるエンターテイナーと言うべきかもしれません。実際、親しくお付き合いするようになって、高橋先生は周囲の人間にとても細やかな「気配り」をなさる方だったのだ、と気付きました。

いまふり返れば、先生のこうした細やかな気配りが、逆に、慣れないうちは「怖い」という印象に繋がっていたのだと思います。大学院生時代に参加した読書会でも(おそらくは短大文科のゼミでも)、他人の意見を適当に聞き流すということはず、いちいち立ち止まり真摯に受け止めてくださる。そのうえで、不明なところはうやむやのまま放置せず、「それはどういうことですか?」とお尋ねになる。そう考えると、これは気配りというより、「実直さ」と言い換えたほうが適切なのかもしれません。何事も「ノリ」や「スピード」がもてはやされるのご時勢ですから、こうした実直さを煙たがる人もいるでしょう。しかし高橋先生の周りにはいつも多くの研究者仲間が集まって、互いの研究を高め(深め)合っていっちゃいます。こうした関係性が築かれたのも、その実直なお人柄ゆえであると思えます。

研究者としての高橋先生のお仕事として最初に挙げられるのは、上智大学文学部での卒業論文以来、すでに五〇年近くにわたって取

り組まれている二葉亭四迷と明治初期翻訳小説に関するご研究です。その成果の一部は、『主題としての(終り)——文学の構想力』(二〇一二年)と『明治の翻訳ディスクール——坪内逍遙・森田思軒・若松賤子』(二〇一五年、本学総合文化研究所助成、第二四回「やまなし文学賞(批評・研究部門)受賞」)の二冊にまとめられています。先生によれば、こうしたお仕事へのベースには、大学院生時代の「明治初期翻訳文化研究会」や(後述する)「明治三十年代研究会」での活動(研究者仲間での切磋琢磨)があったそうです。

そして、研究者仲間との活動成果ということ言えば、高橋先生にとっては若手研究者時代からの「盟友」とも言える小森陽一さんらとの共編著『読むための理論 文学・思想・批評』(一九九一年)と『メディア・表象・イデオロギー——明治三十年代の文化研究』(一九九七年)の二冊が当時の学界に与えたインパクトに触れないわけにはいきません。この二冊が上梓された一九九〇年代は、人文科学にとつては大きなパラダイムチェンジの時期でした。この時期、「言語論的転回」と呼ばれる世界認識のありようそれ自体の組み換えを迫るような考え方が次々に紹介されるのですが、それらが切実に必要だと感じられた背景には、たとえば文学部の再編・縮小・解体に象徴される「文学研究」をめぐる大きな状況変化(危機感)がありました。

こうしたなか、高橋先生をはじめとする当時気鋭の若手研究者グループによって世に出された『読むための理論 文学・思想・批評』は、著者たちの狙いどおり従来の研究スタイルに対する挑発と受け止められ(なにしろ、キャッチコピーは「教授の知らない文学

理論」……でした)、「大人」の研究者たちから反発を受けながらも、「テクスト論」という考え方を一気に浸透させます。それから六年後に刊行された『メディア・表象・イデオロギー』は、「明治三十年代研究会」での数年間にわたる討議をベースにまとめられた論文集で、先述したテクスト論を解体・再構築して、文学研究という枠組みそれ自体の歴史性や制度性をあぶり出そうとする試みでした。同書は『読むための理論』以上の波紋を学界に投げかけ、文学研究に「カルチュラル・スタディーズ」を根付かせました。ちなみに、この「明治三十年代研究会」の活動は、当時短大文科の研究室があった三号館で行われていたそうです。

短大文科教員としての高橋先生のお仕事については、所属が違う私にはその一端しか窺うことができません。文芸学部に着任以来、私は毎年、高橋ゼミからの編入生をゼミに迎え入れてきましたが、彼女たちに訊いてみると、高橋先生は学生に対して「ああしなさい、こうしなさい」ということはおっしゃらず、学生が困ったときにだけ適切な助け舟を出してくださいるのだそうです(せっかちで、教えたがり)の私には真似できないことです)。こうしたことは、ふだんから学生たちをよく見ていないとできないことで、そんなところにも、先生の実直さがよく表れているように思います。

昨今の短大をめぐる厳しい状況の中で、学生の指導にはずいぶんご苦労もあったのではないかと思います。それでもわずか二年の間で、学生の「好き」を大学の「学び」に接続させる手腕は素晴らしく、高橋ゼミからの編入生のなかには、卒業時に日文コース賞を受賞した学生や大学院に進んだ学生も複数いました。その意味で、ご

定年とは言え、高橋先生が本学の教育の現場から退かれることは、文科だけでなく文芸学部にとっても残念なことです。

しかし高橋先生のご本の一節を借りるなら、「(へ終り)こそが起点」です。ご退職を機に、これまでのお仕事を、これまでとは違う視点から更新されていくのでしょうか。ツーリングがご趣味で、まだまだお若い高橋先生のことです。この先もとうぶん「退屈で困る」ということないでしょうが、隙間時間ができたときにはぜひお声かけください。村上春樹研究者の端くれとして、そして、七〇年代の文化に憧れる「遅れてきた青年」の一人として、先生の石巻時代の「青春グラフィティー」の続きを(いつものように美味しいお酒付きで)ぜひ伺いたいです。

付記 高橋先生をお送りするにあたって、今回このような機会を与えてくださった短大文科の皆様にご心よりお礼申し上げます。